

演劇との出会い

高階ひかり 〈2012年度研究生〉

東京演劇集団風との出会いは高校一年生の時です。私の通っていた高校は、専門学校のような学校で、数ある学科やコースの中、私は普通科芸術文化コースに進学しました。芸術文化コースには、伝統として新生が入る同じコースの先輩たちに自分の夢を宣言する場があり、次々に同級生が自分の夢を宣言する中、“あなたの夢は？”と聞かれ、“何もありません”と発言したのは、私ただ一人だけでした。自分が全くもって場違いであることにその時初めて気がつきました。

芸術文化コースに未来を見出せないと思った私は、早々にコースを変更することを考えていました。その最中、コースを変更する前に、賭ける思いで二年生の授業の一貫である5日間の東京研修に、前倒しして一年生で参加しました。その東京研修の最終日、私は《東京演劇集団風》と初めて出会いました。研修のために訪問した拠点劇場の《レパトリーシアター KAZE》で『フランクフルトに恋人がいるサクソ奏者が語るパンダの物語』を観劇し、同じ年に学校の芸術鑑賞行事で劇団風の『肝っ玉おっ母とその子供たち ～あとから生まれてくる人たちに』を観劇しました。いろんな生徒がいる客席に本気で向き合う劇団員の姿勢と、どんな生徒であってもその観客たちと出会う瞬間を、見逃すまいとする劇団員の壁の無さが、私の演劇に対する“嘘っぽくワザとらしい”というイメージをまるきり変えました。

私は高校を卒業してすぐに劇団風の研究生となり、三年間の研究期間を終え、劇団に入団しました。劇団での研究期間は濃密で、研究生の一年目は、劇団風との初めての出会いとなった『パンダの物語』の作者と同じマティ・ヴィスニユックが書いた風のレパトリー作品『戦場のような女—あるいはボスニア紛争の戦場のような女の性について』の読み稽古から始まりました。この作品は女性二人芝居で、同じ年に実習生として入った倉八ほなみと、この作品を提示した劇団の芸術監督 浅野佳成と共に丸一年かけて挑み、実習生卒業公演として上演しました。「どういう公演にしたいか自分たちで企画してみなさい」という浅野からの提案で、私たちは劇団員に手を借りてポスターとパンフレットを作り、チケット代を1000円として上演しました。卒業公演に向かう最中も、全国巡回公演のツアーにスタッフとして参加し、ツアーの間には浅野を始め、風の俳優 栗山友彦、白根有子とのワークショップや勉強会を度々行いました。私にも風の観客だった時代、風の研究生だった時代があったからこそ、今、東京演劇集団風の俳優として、未来の仲間に伝えたいです。《東京演劇集団風》は演劇を通して出会える生身の人の姿やその場にしかない時間、つながることのできる空間を共に作りたい、演劇が自身の人生でありたいと願う人が生きる“場所”です。私は今、この“場所”で、間違えながらも自身の可能性と出会い、人の可能性と巡り合い、そして、演劇の可能性を考え続けています。